

教師が学ぶこと重要

北杜高・千野教諭が「高校」試論

北杜高の千野政寿教諭(韮崎市)が高校や高校教員についての試論をまとめた「高校を考える、29のエッセイと48冊の本」(百年書房)を出版した。〈教員になって10年ちよつとの者が、高校についての本を書くなどおこがましいのは百も承知である〉。そんな言葉から始まる著書は、柔らかな文体で「教師が学ぶ」重要性を強く訴えている。

〈戸松優〉

高校と教師、このままでいいのだろうか?。帯の言葉が、収載する試論の核心をつく。著書全体に貫かれているのは、「教師は学び続けなくてはならない」という自戒にも似た投げかけだ。

千野さんは大学院を修了後、中国新聞社(広島市)に入社。社会部、文化部記者を希望しながらも、配属先は紙面のレイアウトや記事の見出しをつける整理部だった。記事を書きたい思いを抱きながら「にえきらない」3年間を過ごし、古里山梨に戻り、2001年から高校の公民科教諭となった。

「学問をやる」場

出版のきっかけは、2008

年、県をまたいだ人事交流研修だった。長野県伊那北高へ派遣された千野さんは、山梨との違いに「ショック」を受けたという。長野の高校には当時大職員室がなく、教員は各教科の研究室に集う。義務教育の小中学校とは一線を画し、高校、大学は「学問をやる」場と考える意識を強く感じた。

「生き方としての教師とは何



「高校を考える、29のエッセイと48冊の本」(百年書房)

高校を考える、29のエッセイと48冊の本 千野政寿

教科の枠を超えた学問研究を

高校での研究は2つの要素があると千野さんは言う。教材をより深く理解し、教授法を考える研究と、教科の枠に縛られない学問研究だ。大学時代から、インド哲学を専門に研究していた経験から、自身のテーマを追究することで「広い視野で物事を見て楽しむことができる」と実感。生徒には、自身の考え方の支えになる「教養を身につけてほしい」と考えている。

今を問い続ける

著書ではこのほか、卒業生に本を贈る取り組みもつづけている。千野さんの高校3年時の担任は卒業式の日、教卓に新しい文庫本を並べ一人1冊選ばせ、贈ってくれた。恩師に倣い、卒業生を送り出す日には本を贈るという千野さん。「朝夕の部活、引退後は受験と高校生は忙しい。思索を巡らせ本を読むよう、教員の働きかけが必要だと思う」。著書の最後には「高校を考える48冊のリスト」をまとめた。

執筆を通して千野さんが構想したのが「高校学」だ。高校の歴史、教科書、文理分け…。「高校は今のままでいいのか。教員にもう一度考えてほしい」。現状を批判するのではなく、今を問い続ける姿勢が著書の行間から浮かび上がってくる。

定価1080円。問い合わせは百年書房、電話03(6666)9594。

高校に関する試論を出版した千野政寿北杜高教諭。「自分自身が学び続けながら、『高校学』をめざしていきたいという思いがある」

北杜高